

起点 を示す格助詞「を」と「から」の誤用分析

杉村 泰

名古屋大学

sugimura@lang.nagoya-u.ac.jp

1. はじめに

本発表では日本語の 起点 を表す格助詞「を」と「から」について論じる。

- (1) a. 船が港から離れる。
- b. 船が港を離れる。

2. アンケート調査

質問 次の文の()に格助詞「を」、「から」のうち正しいと思う方を一つ入れて下さい。

1. 私は毎日7時に家()出る。
2. 彼はアメリカの有名大学()出た。
3. 先生がいたずらをしている学生に、「教室()出なさい」と言った。
4. 彼女は家()出て一人暮らしを始めた。
5. 彼は学歴詐称が見つかって、大学()出るようになった。
6. 彼女は大学()出て、まっすぐ家に帰った。
7. 母は夕食の支度をするために4時にデパート()出た。
8. 警察が犯人に、「そのビル()出る」と言った。
9. 犯人は逃げる時、裏口()出てきた。
10. 彼はヤクザの 組()出る決心をした。
11. 彼は刑務所()出て、すぐに捕まった。
12. 地震でつぶれたビル()出た。
13. 彼女は裏門()出て、すぐに車にはねられた。
14. 夫が知らない女の家()出てきたのを見た。

アンケート実施

名古屋大学1年生58人(2004年11月18日、於名古屋大学)

北京第二外国語学院日語系4年生50人(2004年11月24日、於北京第二外国語学院)

上海外国語大学日本文化経済学院4年生50人(2004年11月29日、於上海外国語大学)

東呉大学日本語文学系 4 年生 49 人 (2004 年 11 月 30 日、12 月 2 日、24 日、於台北 東呉大学)

	名大		三校平均		北京		上海		台北	
	を	から	を	から	を	から	を	から	を	から
1. 私は毎日 7 時に家 () 出る。	100.0%	0.0%	72.5%	27.5%	86.0%	14.0%	56.0%	44.0%	75.5%	24.5%
2. 彼はアメリカの有名大学 () 出た。	100.0%	0.0%	46.3%	53.7%	28.0%	72.0%	70.0%	30.0%	40.8%	59.2%
7. 母は夕食の支度をするために 4 時にデパート () 出た。	89.7%	10.3%	67.4%	32.6%	78.0%	22.0%	54.0%	46.0%	70.4%	29.6%
6. 彼女は大学 () 出て、まっすぐ家に帰った。	87.9%	12.1%	53.7%	46.3%	68.0%	32.0%	38.0%	62.0%	55.1%	44.9%
4. 彼女は家 () 出て一人暮らしを始めた。	86.2%	13.8%	63.1%	36.9%	58.0%	42.0%	60.0%	40.0%	71.4%	28.6%
10. 彼はヤクザの組 () 出る決心をした。	84.5%	15.5%	58.4%	41.6%	58.0%	42.0%	60.0%	40.0%	57.1%	42.9%
5. 彼は学歴詐称が見つかって、大学 () 出るようになった。	67.2%	32.8%	56.0%	44.0%	46.0%	54.0%	59.0%	41.0%	63.3%	36.7%
11. 彼は刑務所 () 出て、すぐに捕まった。	65.5%	34.5%	47.7%	52.3%	46.0%	54.0%	44.0%	56.0%	53.1%	46.9%
13. 彼女は裏門 () 出て、すぐに車にはねられた。	44.8%	55.2%	37.6%	62.4%	32.0%	68.0%	36.0%	64.0%	44.9%	55.1%
12. 地震でつぶれたビル () 出た。	12.1%	87.9%	30.9%	69.1%	34.0%	66.0%	32.0%	68.0%	26.5%	73.5%
3. 先生がいたずらをしている学生に、「教室 () 出なさい」と言った。	8.6%	91.4%	59.4%	40.6%	56.0%	44.0%	60.0%	40.0%	62.2%	37.8%
8. 警察が犯人に、「そのビル () 出ろ」と言った。	8.6%	91.4%	24.8%	75.2%	28.0%	72.0%	22.0%	78.0%	24.5%	75.5%
9. 犯人は逃げる時、裏口 () 出てきた。	8.6%	91.4%	24.8%	75.2%	18.0%	82.0%	26.0%	74.0%	30.6%	69.4%
14. 夫が知らない女の家 () 出てきたのを見た。	6.9%	93.1%	26.8%	73.2%	26.0%	74.0%	22.0%	78.0%	32.7%	67.3%

注：3、7は東呉大学で1人ずつ未回答。5は上海外国語大学で1人未回答。未回答は1人当たり0.5人として計算した。

3. 先行研究

三宅 (1995, 1996)

- ・ 意志的にコントロールされない移動の場合は、ヲ格を使うことができない。
 - (2) 煙が煙突 { *を/から } 出た。
 - (3) 太郎が部屋 { を/から } 出た。
- ・ 着点をも同時に含意する場合は、ヲ格を使うことはできない。
 - (4) 太郎が部屋 { *を/から } 庭に出た。

楠本 (2002)

- (5) 太郎を殴った (力学的な支配力)
- (6) 良き友を持つ (心理的支配力)
- (7) 山に登る 角を曲がる (主体の行為が行われる領域として一種の占有意識が働く)
「このような「支配性」は「を」格文に共通して見られる現象であり、それ故「を」格に対するスキーマ的要素を含むものと考えられる」(p.8)
 («家を出る」「大学を卒業する」「席を立つ」等について)「これらの「を」格文は主体が属していたものからの離脱を表し、さらに「私ごと」の延長として離脱する目的が暗示される (例えば、「家を出て会社へ行く」等) というように学習者に教えるならば、「を」格の存在が理解出来、正しい使い方が出来るようになるであろう」(p.10)

4. 母語話者の「を」と「から」の使い分け

1. 私は毎日7時に家 () 出る。(を : 100.0%、から : 0.0%)
 14. 夫が知らない女の家 () 出てきたのを見た。(を : 6.9%、から : 93.1%)
 6. 彼女は大学 () 出て、まっすぐ家に帰った。(を : 87.9%、から : 12.1%)
 9. 犯人は逃げる時、裏口 () 出てきた。(を : 8.6%、から : 91.4%)
 7. 母は夕食の支度をするために4時にデパート () 出た。(を : 89.7%、から : 10.3%)
 12. 地震でつぶれたビル () 出た。(を : 12.1%、から : 87.9%)
- ・ 1、6、7は「家」での家庭生活、「大学」での勉強、「デパート」での買い物等の活動を終え、次の活動に入ることを表す。(「会社 { *から/を } 辞める」)
 - ・ 14、9、12は「女の家」、「裏口」、「ビル」からの移動を表す。

インターネットの検索エンジン goo による検索 (<http://www.goo.ne.jp/>) 2005.07.18 実施

- 「 時に会社を出る」247 件、「 時に会社から出る」1 件
「 時に家を出る」1,490 件、「 時に家から出る」7 件（うち 4 件は「そんな時」等）

(8) 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。(川端康成『雪国』) (?トンネルから)

(9) 台風の時は家から出るな。地震の時は家から出る。(?家を)

(http://blogs.dion.ne.jp/usawant_you/archives/2004-10.html)

(10) a. 太郎が煙突から出る。 船が港から離れる。 花子は担当から外れた。(起点)

b. 太郎が煙突を出る。 船が港を離れる。 花子は担当を外れた。(働きかけ)

(煙突内の移動) (港を後にする) (担当を辞める)

・「から」格は 起点 を標示し、「を」格は 働きかけの対象 を標示する。

5. 学習者の誤用

1. 私は毎日 7 時に家を出る。(母語話者 100.0% 北京 86.0% 上海 56.0% 台北 75.5%)

2. 彼はアメリカの有名大学を出た。(母語話者 100.0% 北京 28.0% 上海 70.0% 台北 40.8%)

6. 彼女は大学を出て、まっすぐ家に帰った。

(母語話者 87.9% 北京 68.0% 上海 38.0% 台北 55.1%)

そこでの活動を一段落させ、次のステップに移るイメージ。単なる 起点 ではない。

3. 先生がいたずらをしている学生に、「教室から出なさい」と言った。

(母語話者 91.4% 北京 44.0% 上海 40.0% 台北 37.8%)

8. 警察が犯人に、「そのビルから出る」と言った。

(母語話者 91.4% 北京 72.0% 上海 78.0% 台北 75.5%)

3 は「出て行け」(先生と学生が同じ領域)、8 は「出て来い」(警察と犯人が別の領域)。

視点の違いが上の数字の差となって現れるのか？

参考文献

楠本徹也 (2002) 「「を」格における他動性のスキーマ」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』

28, 東京外国語大学留学生日本語教育センター, pp.1-12

三宅知宏 (1995) 「ヲとカラ 起点の格標示」宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法』

(上) 単文編, くろしお出版, pp.67-73

(1996) 「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』110, 日本言語学会, pp.143-165